

「こころ」試論

内多文子

一、はじめに

漱石没後五十年たった今日、多くの研究者のあいだで、漱石の明治四十年以降の作品および講演をあらためて検討し評価しなおそうという動きが盛んにみられる。それは漱石が、今日では一般的となった近代インテリゲンチヤの苦悩と闘いをあの早い時代に明らかにしていたからである。漱石は鋭利な目を持ち、時代を先取りした作家として評価されつつある。

しかしながらわたしがここでとりあげる「こころ」はその中でも、猪野謙二氏や荒

正人氏に代表されるように「観念的な構作によって無理に小説を『片付け』よう」と

した「理念の文学」といわれ、文学的にはむしろ瘠せたものとしてみなされる傾向の強い作品であった。その大きな理由の一つに「明治の精神に殉死する」という先生の死が、作品のなかでは唐突に思え、なかなか位置づけにくいと考えられる。

しかし、ここで留意しておかねばならないのは、玉井敬之氏がすでに指摘しているように、明治四十年代の漱石は、「病後の療養を犠牲にしてまでも」④「直接に人に訴えかけねばやまないような切実な衝動」に

かられており、連続的に講演にでかけていることである。明治も四十年を過ぎて、時代の矛盾をいち早く予知していた彼にとって、「それは精神の複雑な操作を通してしか表現できない創作や、あるいは白い原稿用紙のうえにペンをすすめる孤独な作業をまどろこしいと感ずるほどの切迫した衝動であった」⑤と思われる。その時漱石の内に

然えた熱い情念の炎が、おのずから彼に一つの視点を与え、「こころ」という作品を脱稿させたとみることはあまりにも性急であるだろうか。「現代日本の開化」のなかで聴衆に「只出来るだけ神経衰弱に罹らない程度に於て、内發的に變化して行くが好からう」⑥と消極的に語った彼こそ、実は「機械的に變化を餘儀なくされる爲にただ上皮を滑つて行き、又滑るまいと思つて踏張る爲に神経衰弱になる」といった。神経衰弱にかかつてまでも踏張ったその人ではなか

つたろうか。滑ってゆく漱石自身をどこで
 くいじめ、流れる時代になにを梃子として
 生きようとしたのか。少なくともわたしに
 は、彼の梃子のうちの一つに「こころ」と
 いう作品があるように思えてならないので
 ある。わたしはここで「こころ」をとりあ
 げ、先生の死を中心に漱石自身が「明治の
 精神に殉死する」ことをどのように考えて
 いたのかあきらかにしてみたいと思う。

註

- ① 猪野謙二「明治の作家」(岩波書店)
 一五〇頁。
 ② 荒正人「心」と『道草』(『現代の
 エスプリ』二十六号)
 ③ 「全集」第六卷所収(本稿では「全
 集」というのは岩波書店版をさす。な
 お、いちいち注記しないが、「こころ」
 からの引用は「全集」第六卷による。)④⑤⑥ 「夏目漱石論」(『日本文学』一

九六〇年七月号)

⑦⑧ 「現代日本の開化」(『全集』第十
 一卷三四三頁)

二、先生とKと私

「こころ」は「先生と私」「両親と私」
 の章がもつばら「私」という人物によつて
 回想される。漱石はなぜ「私」という人物
 を設定したかについて、これまでずいぶん
 問題とされてきたが、越智治雄氏によつて、
 先生は「私」の無意識な部分を意識化し
 た存在である^①ことが明らかにされた今、
 「私」は「暗い人世の影を遠慮なくあなた
 の頭の上に投げかけて上ます。然し恐れて
 は不可せん。暗いものを疑と見詰めて、そ
 の中から貴方の参考になるものを御攫みな
 さい」と語る先生の啓発をたとりとして、
 先生の歩いた道を同じように踏み出しはじ
 めている人間と想像できよう。

先生と「私」の関係をこのように跡づけ
 てみると、「先生と遺書」の中に同じ人間
 関係があることに気づかざるをえない。

「しかし段々落ち付いた気分分、同じ現
 象に向つて見ると、さう容易くは解決が
 着かないやうに思はれて来ました。現實
 と理想の衝突、——それでもまだ不充
 分でした。私は仕舞にKが私のやうにたつ
 た一人で淋しくつて仕方がなくなつた結
 果、急に所決したのではなからうかと疑
 がひ出しました。さうして又慄としたの
 です。私もKの歩いた路を、Kと同じや
 うに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々
 風のやうに私の胸を横通り始めたからで
 す。」(傍点は内多)

Kと先生は、おなじ年で子ども時から
 の友だちであり、上京してからは同居して
 いた。上京してから三年目に先生は叔父に
 財産をだましとられ、Kは養子先との約束

を履行しなかつたことで実家から絶縁され「共に故郷を喪失して」^⑧おり熟知の間柄であつた。肉親以上の暖かいおもいやりをもつてKに接していた先生は、Kの自殺の後自分の弄した策略を悔いながらも死んだ気で生きつづけた時、はじめてKの運びとつた死の意味を客観的に見つめることができたのである。

Kのあるいた跡をたどる先生のように、「私」も先生の遺書のなかから何を感じとり、彼の足跡をむみしめて進もうとする。「自由と独立と己れとに充ちた」時代に生き、ともにその淋しみを感じたというKと先生と私。この三人を結びつけるものはないのかあきらかにする必要があるだろう。

註

① 越智治雄「漱石私論」(角川書店)

二五九頁

② 前註と同書二七三頁

三、Kについて

まずKについて考えてみたい。Kは「薄志弱行で到低行先の望みはないから」という簡単な遺書を残して自殺した。彼はなにゆえ自殺を選ばねばならなかつたのだろうか。

先生はKの死を「現実と理想との衝突」といい、「一人で淋しくつて仕方がなくなつた」からだとみている。それを受けて駒尺喜美氏は「Kの自殺は失恋からではなくて、それが直接のきっかけに相違なくとも、その事件によって深い自己不信、他人不信、人間不信におちいり、その淋しさに耐えられなくて自殺した」^⑨と説明する。はたして彼は自己不信から他人不信そして人間不信にまで不信を拡大させていたのだろうか。故郷をなつかしんで夏休みにになると即座

に帰省する先生に対して「さう毎年家へ帰つて何をするのだ」と聞くKは、東京にふみとどまって勉強にはげむ男であつた。

「道のためなら」と養父母を欺いた彼は、剛情であつたがために仕送りを断られたが「今迄通り勉強の手をちつとも緩めずに、新しい荷を背負つて猛進した」という。Kは「口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛る男であり「自分で自分を破壊しつつ」進んだ男であつた。だんだん感傷的になつていった彼の健康や精神状態を心配した先生は、「餘計な仕事をするのは止せ」と忠告するが「ただ學問が自分の目的ではない」「意志の力を養つて強い人になるのが自分の考だ」と反論する。彼の《道》は執拗に彼をかりたてているのである。なぜこれほどまでにかりたてられねばならなかつたのか。理想の人の姿を求めてひたすらに歩む彼をささえていたのは何だつたのだろうか

か。

漱石は明治四十四年に大阪で「文藝と道徳」と題して昔の道徳について講演している。

「昔の道徳、是は無論日本での御話ですから昔の道徳といへば維新前の道徳、即ち徳川氏時代の道徳を指すものであります。其昔の道徳はどんなものであるかと云ふと、貴方方も御承知の通り、一口に申しますと、完全な一種の理想的の型を拵へて、其の型を標準として、其型は吾人が努力の結果實現の出来るものとして出立したものであります。だから忠臣でも孝子でも若くは貞女でも、悉く完全な模範を前へ置いて、我々如き至らぬものも意思の如何、努力の如何に依つては、此模範通りの事が出来るんだと云つたやうな教へ方、徳義の立て方であつたのです。尤も一概に完全と云ひましても、意

味の取り方で、いろ／＼になりますけれども、此所に云ふのは仏語などで使ふ純一無雜先ず混り氣のない所と見たら差支ないでせう。例へば鑛の様に種々な異分子を含んだ自然物でなくつて純金と云つたやうに精錬した忠臣なり孝子なりを意味して居ります。斯く完全な模範を標榜して、それに達し得る念力を以て修養の功を積むべく餘儀なくされたのが昔の徳育であります。(中略) どうしても此模範通りにならなければならん、完全の域に進まなければならんと云ふ内部の刺激やら外部の鞭撻があるから、模倣といふ意味は離れませんが、其代り生活全体としては、向上の精神に富んだ気概の強い邁往の勇を鼓舞される様な一種感激性の活計を営むやうになります。」(傍点は内多)

すぐに思いあたることは、Kの内面を形

成していた道徳と、漱石がここで述べた徳川時代の道徳とが酷似しているということである。漱石はその後、同じ講演の中で、科学が進歩した結果、「完全な模範」とは幻想であることが衆知となつていふ言つてはいるが、Kの死が明治の半ばであることと、真宗の寺の息子であること、「義理堅い點に於いて、寧ろ武士に似た所がありはしないかと疑われ」るやうな父に育てられたということを考えあわせると、Kの内面に昔の道徳が生きていたとしても決して不思議ではない。

大学に入学し大観音のそばの汚ない寺の中に閉じ籠つたKはだんだん坊さんらしくなつていったという。手くびに珠数をかけたKの姿は、ちよつと見ると仏による救済を望んでいるように見える。が、ほんとうにそうであつたらうか。口からは時々お経がもれ、キリストや、モハメッド教や後に

日蓮にまで興味を示したKにとってそれは努力の結果実現されるべき模型であつて、決して「行人」の一郎が救済を求めて「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか」と叫んだ心情と同じものではなかつた。

努力いかんによつて実現されるべき模型にむかつて突き進んだKはしだいに感傷的になつてゆく。

「時によると、自分丈が世の中の不幸を一人で背負つて立つてゐるやうな事を云ひます。さうして夫を打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横はる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くやうに思つて、いら／＼するのです。(中略) Kはたゞ學問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考へだと云ふのです。それには成るべく窮屈な境遇にゐな

くてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、丸で酔興です。其上窮屈な境遇にある彼の意志は、ちつとも強くなつてゐないのです。」

先生の暖い眼は、彼が「強い人」に向つて一層肉体を鞭撻していくようすを如実に伝えている。このようなKに対して女の人を近づけようとした先生の好意はなかなか実を結びそうに見えない。

「私は成るべく、自分が中心になつて、女二人とKとの連絡をはかる様に力めました。Kと私が話してゐる所へ家の人を呼ぶとか、又は家の人と私が一つ室に落ち合つた所へ、Kを引つ張り出すとか、何方でも其場合に応じた方法をとつて、彼等を接近させやうとしたのです。勿論Kはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起つて室の外へ出ました。又ある時はいくら呼んでも中々出て来ま

せんでした。Kはあんな無駄話をして何処が面白いと云ふのです。私はたゞ笑つてゐました。然し心の中では、Kがそのために私を軽蔑してゐる事が能く解りました。」

先生の遺書の中に出てくるKの姿は、彼の内なる道徳観が明らかになつて、異常ではないのである。「道のためには凡てを犠牲にすべきものだ」と伝ふのが彼の第一信条なのです。から、攝慾は無論、たとひ慾を離れた變そのものでも道の妨害になる」のだから。Kの脳裏には、難行苦行の人が焼きついて離れなかつたのである。

そのようなKがお嬢さんに恋した時、彼のもつてゐる矛盾が一举にさらけ出されることになつた。彼は「進んで可いか退ぞいで可いか」迷つたと自白している。那古の海で「つきおとしたらどうする」と聞く先生に「丁度良いやつてくれ」と答えるKは

その迷いの絶頂にいたのである。彼の道徳觀に支えられた「強い人」は恋を必要とほしなはずであつた。女性に目をくれてはいけなかつたのである。しかし、彼には退くことはできなかった。彼の恋、彼の内なる自我の叫びは、彼にはじめて「自由と己れとに充ちた時代」に生きる喜びを味わせ、彼の冷えきつていた心をあたためはじめたからである。お嬢さんへの思慕は、彼が古い道徳觀を脱ぎすて、自我の覺醒にしたがつて、現代を生きぬこうとする人間になるための、内なる変革をせまるものであつた。Kの「自白は最初から最後まで同じ調子で貫ぬ」かれ、「重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせない」ものだったという。「他の思はくを憚かる程弱く出来上つてはいない」天性をもつ彼が、「自分の弱い人間であるのが實際恥づかしい」といい、先生に批判を求める彼の胸の内を

は、古い道徳觀と自我とが絶えまなく相克しつづけていたに違ひない。彼はまさにここで分岐点に立たされていたと言えよう。せつかくKに訪れた絶好の機会も、同じくお嬢さんを愛していた先生によつてまたたくまにつぶされてしまい、その上死を選ぶべき道に向つて背中をどやされるのであつた。

「私は丁度他流試合でもする人のやうにKを注意して見てゐたのです。私は、私の眼、私の心、私の身體、すべて私といふ名の付くものを五分の隙間もないやうに用意して、Kに向つたのです。罪のないKは穴だらけといふより寧ろ明け放しと評するのが適當な位に無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管してある要塞の地圖を受取つて、彼の眼の前でゆつくりそれを眺める事が出来たも同じでした。」

ひたすら「強い人」に向つて彼の〈道〉を突走り、「たゞ困難に慣れてしまへば、仕舞に其困難は何でもなくなるものだと極めていた」Kを、先生は「我慢と忍耐の區別を了解していない」のだと、非常に冷静にみつめてゐる。Kと小さい時から熟知の間柄であつた先生には、Kの道徳觀の展開の筋道は手に取るようになつたのであつた。このやうな先生にとつて「彼の保管している要塞の地圖」とは「個人の過失に對しては非常に嚴格な」古い道徳觀であり、それは「少しの過ちがあつても許さない、すぐ命に關係してくる」ものであつた。だから「Kが理想と現實の間に彷徨してふらふらしているのを發見した」先生は「ただ一打で彼を倒す事が出来るだらう」と確信してゐる。このやうなKにとつて、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」といふことは、まさに「復讐以上に残酷な意味を

有つ」ことばであり、彼の古い道徳を「層強固に打ち固めたものであった。先生の「彼が折角積み上げた過去を蹴散らした積ではありません。却ってそれを今迄通り積み重ねて行かせやうとしたのです。」(傍点は内多)という告白はなんと残忍な響きをもっていることだろうか。

「其頃は覚醒とか新らしい生活とかいふ文字のまだない時分でした。然しKが古い自分をさりと投げ出して、一意に新らしい方角へ走り出さなかつたのは、現代人の考へが彼に缺けてゐたからではないのです。彼には投げ出す事の出来ない程尊とい過去があつたからです。彼はそのため今日迄生きて來たと云つても可い位なのです。だからKが一直線に愛の目的物に向つて猛進しないと云つて、決して其愛の生温い事を証據立てる譯には行きません。いくら熾烈な感情が燃へて

ゐても、彼は無暗に動けないのです。前後を忘れる程の衝動が起る機會を彼に与へない以上、Kは何うしても一寸踏み留まつて自分の過去を振り返らなければならなかつたのです。さうすると過去が指し示す路を今迄通り歩かなければならなくなるのです。其上彼には現代人の有たない強情と我慢がありました。私は此双方の點に於て能く彼の心を見抜いてゐた積なのです。」

更に先生の氷のようなことばはつづく。

「止めて呉れつて、僕が云ひ出した事ぢやない、もと／＼君の方から持ち出した話ぢやないか。然し君が止めたければ、止めても可いが、たゞ口の先で止めたつて仕方があるまい。君の心でそれを止める文の覺悟がなければ、一體君は君の平生の主張を何うする積なのか」このことばこそ、Kを死の谷へつき落し

たことばであり、これによってとどめを刺されたのである。「覺悟、——覺悟ならぬ事もない」と「獨言のやう」で「夢の中間の言葉のやう」なそれは、彼が死を決意した瞬間にその口からもれたことばであつたに違いない。昔の人びとが理想に向つて走るべき《道》を踏みはずした場合、必ず死でもつてその弱点をつぐなわなければならなかつた。Kもその例外では決してなかつた。

果して彼の死は、他人不信や人間不信のためであつたらうか。Kに急変した先生の利己心を責める気持ちがあつたらうか。わたしはKの死はあくまで、お嬢さんに思慕をいだくことによつて、彼の内なる道徳が破綻をきたしたために選ばれた死であると思つ。自分は薄志弱行で到底先行の望みはないから、自殺する」という単純なことばは、古い道徳観によつて己れを律し、精神

と肉体を極度に切り離す傾向のあつた彼が、結局は自分の肉体を殺すことによつてしか、彼の道徳の内では前進できなかったことを示しているのではなからうか。

Kの死の意味は明らかにされたが、もう一つKについては重要な問題が残つてゐる。それはKがあれほど希求してやまなかつた「意志の力を養つた強い人」とは一体どんな人であつたのだらうかということである。Kの道徳観は、明治四十四年に「文藝と道徳」を講演している漱石にとつては「古い」ものであつたらう。しかしKの道徳観は古かつたけれども、彼は決して「忠臣」や「孝子」を希求したのではなかつたことに注目しなければならぬ。養父を欺いたことを知つた先生に非難された時、彼は「道のためなら、其位の事をして構はない」と大胆にいひきつてゐる。先生には、その時彼がもちいた《道》ということ

ばがよくわからなかつたらしい。Kにも漠然としたものであつたのだらうが、實際偉くなるつもりでいた彼らにとつて《道》は修養と努力如何によつては理想の型にいちばん近づける《道》と思われたからこそ「氣高い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行かう」と意氣ごんだのであつた。

彼らのいうこの《道》がもし、「忠臣」や「孝子」につながつてゐたのなら、養父を欺くことはできないだらう。Kの道徳観は徳川時代の道徳を基礎としながらも、その古い道徳観そのものでは決してなかつたのである。

ここで彼がなぜ「意志の力を養つた強い人」になりたかつたかを考えることは大切である。

漱石は、現代日本の矛盾を解明した「現代日本の開化」のなかで、「日本の現代開化の真相も此話と同様で、分らないうちこ

そ研究もしてみたいが、斯う露骨に其性格が分つて見ると却つて分らない昔の方が幸福であるという氣にもなりません。」と述べてゐる。明治四十四年にこの講演をした漱石の眼には、終末の近づいた明治の矛盾が明らかに写つていたのであらう。しかしKの青年時代である明治の中期は、まだまだ開化の真相を見ぬくことは困難だつたに違いない。だがわたしは、明治の時代がいまだ混沌として人々にもてはやされてゐた時に、Kこそが、いち早く「自由と独立と己れとに充ちた現代」の矛盾に気づいてゐたのではなからうかと考えるのである。Kは「自由と独立と己れとに充ちた」時代の本質は、「自由」という名のもとの競争を基盤とした資本の論理に従つて人々が押し流されてゆく時代、つまり「自己本位の能力を失つた」^⑤時代であることを予知していたのではなからうか。「外から無理押しに

押されて否應なしに其云ふ通りにしなれば立ち行かない」という時代を真に見抜けた彼だからこそ、その時代を生きぬくには自分の内に燃える内発的な力、つまり意志の力を養って「強い人」にならねばならないとひたすら自分を鞭うったのである。日本資本主義がその支配圏を広げてゆく勢いが急であればある程、Kの胸に燃えていた「意志の力を養った強い人」はより急速に強く成長しなければならなかったのである。彼は、すさまじいまでに光る現代を見抜く目をもっていたのである。「もつと早く死ぬべきだのに何故今迄生きてゐたのだらう」という文句を遺書に書きそえずにお

うにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうか」と疑うが、まさにKは絶望し淋しく一人で死んでいったのである。これまでの「こころ」の研究論文は、策略をめぐらしてKを陥し入れた加害者である先生の罪悪感に重点をおき、Kの死の意味の分析を軽視していた。わたしはKの死をこのように捕えてはじめて、先生の死の意味があきらかにされると考えるのである。

註

本質を予知しつつ、闘いえずして敗れた最初の人ではなかつたらうか。彼の遺書は現代に対する絶望を語っているようにわたしには思える。先生は、のちに「Kが私のや

四、先生と明治の精神

- ① 駒尺喜美「漱石の自己本位と連帯」と（八木書店）二二七頁
- ② 「文藝と道徳」（全集）第十一卷）三六八頁
- ③ 「行人」（全集）第五卷）七二五頁
- ④⑤⑥ 「現代日本の開化」（全集）第十一卷）三四三頁、三四四頁

「たゞ斯ういふ風に物を解きほどこいて見たり、又ぐる／＼廻して眺めたりする癖」のあつた先生は、Kの死について明らかにしようと努める。「私は仕舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑がひ出しました」という述懐は、Kを殺したのは自分だという罪悪感にとらわれ、動けなくなつた彼が、Kの死の中に自分との共通点を見つけ同じ道を歩いてゆく人間としてKを意識しはじめたことを明らかにしている。先生の感じた「淋しみ」はもつと早く死ぬべきだったのに」と現代に自分の生きるべき場所を確保できなかったKの淋しみであり、「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないで

せう」と「私」に告げたその「淋しみ」であつた。

現代の矛盾に気づきつつ、時代に押し流され孤立して歩いてゆかねばならなかつた先生の姿は、「私の個人主義」の中で述べられた漱石の姿と重ねあわせて考えることができよう。

「私は此世に生れた以上何かしなければならん、と云つて何をして好いか少しも見當が付かない。私は丁度霧の中に閉ぢ込められた孤獨の人間のやうに立ち竦んでしまつたのです。さうして何處からか一筋の日光が射して來ないか知らんといふ希望よりも、此方から探照灯を用ひてたつた一條で好いから先迄明らかに見たいといふ氣がしました。所が不幸にして何方の方角を眺めてもぼんやりしてゐるのです。ぼうつとしてゐるのです。恰も囊の中に詰められて出る事の出來ない人

のやうな氣持がするのです。私は私の手にただ一本の錐さへあれば何處か一ヶ所突き破つて見せるのだがと、焦躁り抜いたのですが、生憎其錐は人から与へられる事もなく、又自分で發見する譯にも行かず、たゞ腹の底では此先自分はどうかするだらうと思つて、人知れず陰鬱な日を送つたのであります。」

その後、英國へ留学の命をうけた漱石は、「私は出來るだけ骨を折つて何かしやうと努力しました。然し何んな本を讀んでも依然として自分は囊の中から出る譯に參りません。此囊を突き破る錐は倫敦中探して歩いても見付りさうになかつたのです。私は下宿の一間の中で考へました。詰らないと思ひました。いくら書物を讀んでも腹の足にはならないのだと諦めました。同時に何の爲に書物を讀むのか自分でも其意味が解らなくなつて來ま

した。」^⑧
と模索しつづけ、

「此時私は始めて文學とは何んなものであるか、その概念を根本的に自力で作上げるより外に、私を救う途はないのだと悟つたのです」

といい、ここに至つてはじめて「自己本位」といふ境地を切り開くことになる。

「ところ」の中の先生は「何かしたくて堪らなかつたのだけれども、何もする事が出來ないので已を得ず懷手をしてゐた」が、しだいに、彼の心のうすきは、自己の手で自己を裁くべきではないかという自己本位の決断をせまるようになってくる。「人に鞭たれるよりも、自分で自分を鞭つべきだといふ氣になります。自分で自分を鞭つよりも、自分で自分を殺すべきだといふ考」がそれなのである。

このやうな先生にとつて、一つの時代の

終焉は多大な影響を与えずにはおかない。明治天皇の死に接して、「最も強く明治の影響を受けた」先生の脳裏には、新潟から東京へ遊学し、東京の人を畏れながらも偉くなろうと野心を燃やしていた若き日の姿が横ぎったに違いない。

自己本位による死を決意しつつあった先生に、さらにその死を急がせたものは、乃木大将の殉死であつたらう。先生は乃木大将の殉死について、「乃木さんは此三十五年の間死なう／＼と思つて死ぬ機会を待つてゐたらしいのです。私はさういう人にとつて、生きていた三十五年が苦しいか、取つて、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突きたてた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へました」と感想をのべている。

乃木大将の殉死そのものは、封建的な道徳に支えられ、武士道精神そのもののであらわれであつたが、Kの死の中から新しいも

のを見つけた彼には、乃木大将の死は、誰も彼が死ななくても何も非難しない時代にあって武士道精神に殉じたものと思へ、そこに自己本位の精神つまり「自裁の精神」^④をみたのではなからうか。

「明治の精神に殉死する」ということはの中の「明治の精神」はこれまで勝本清一郎氏や猪野謙二氏らによって「士大夫精神」^⑤と説明されてきた。Kの死の過程とその後、先生をみてきたわたしは、これらの論には賛同できない。漱石は「明治の精神」をもつと積極的にとらえていたからである。先生が「何だか古い不要な言葉に親ら

しい意義を盛り得たやうな心持がした」ということは、「自己本位」ということばをえて、「今迄霧の中に閉じ込まれたものが、ある角度の方向で明らかに自分の進んで行くべき道を教へられた」^⑥ということと一致する。先生は、Kの死の意味を考へてゆく

中で、「今迄内發的に展開して來たのが、急に自己本位の能力を失つて外から無理押しに押されても否應なしに其云ふ通りにしなければ立ち行かない」^⑦明治の本質にふれた。押し流されていた自分も同時に発見したに違いない。そのような彼に、ただ残されたものは、「明治の精神」＝「自己本位」の精神に従つて自分を裁くことであつたのである。「自由と独立と己れとに充ちた現代」は「自己本位」の精神をしつかりと握らねば人間らしく生きられない時代であつたからである。

自己本位の精神をつかんだ先生は自殺する。彼の選ぶべき道は死であつたから。明治の精神に殉死する」という精神こそ、漱石があれ程叫び求めた近代的個人主義確立の精神だったのであるまいか。

註

①②③ 「私の個人主義」〔全集〕第十

一卷) 四四一頁・四四三頁

④ この「自裁の精神」は安永武人教授が講義中使われたものによる。

⑤ 「座談会明治文学史」(岩波書店) 四四六頁

⑥ 「私の個人主義」(前掲書) 四四五頁

⑦ 「現代日本の開化」(全集) 第十一

卷) 三三四頁